長野県総合計画審議会議事録

１　日　時：平成19年（2007年）６月14日（木）午前10時から12時まで
２　場　所：長野県庁３階 特別会議室
３　出席者
委員：小宮山淳会長、有吉美知子委員、伊藤かおる委員、近藤光委員、滝澤修一委員、平尾勇委員、藤原忠彦委員、古田睦美委員、細川佳代子委員、松下重雄委員、若林甫汎委員
専門委員：遠藤守信専門委員、北原曜専門委員、花岡勝明専門委員、樋口一清委員、松永哲也委員、横道清孝委員
長野県：企画局長 和田恭良、企画課長 岩崎弘、政策評価課長 原山隆一、企画課企画幹兼課長補佐 佐藤則之ほか
４　議事録
（進行：企画課 佐藤企画幹）
それでは、定刻になりましたので、ただいまから長野県総合計画審議会を開会いたします。
私、本日の議事に入るまでの間進行を務めます、企画課の佐藤です。どうぞよろしくお願いします。
最初に、出席状況についてご報告いたします。本日、池田委員、太田委員、藤森委員、鷲沢委員は、所用のため欠席する旨の連絡がございました。そのほかの委員、11名の皆様にはご出席をいただいておりますので、審議会条例第６条の規定により、会議が成立していることをご報告申し上げます。
専門委員の皆様については、樋口委員さんが若干遅れておりますが、皆様ご出席の予定です。
次に、資料の確認をいたします。お手元の配布資料一覧をご覧ください。本日の資料は、１から、資料７までございます。このうち、２から４の資料につきましては、事前にご送付申し上げてございます。本日追加でお配りいたしましたのは、資料１「計画策定日程」、資料５「各種懇談会・意見募集等で頂いたご意見・ご提言（３）」、資料６「地域懇談会における主なご意見・ご提言」及び資料７でございます。
なお、参考といたしまして、ボイス81地域会議の開催予定をつけてございます。不足等ございましたら、係の者が伺います。お知らせください。
それでは、これより議事に入りたいと思います。当審議会の議長は、会長が務めることになっておりますので、小宮山会長さん、よろしくお願いします。

（小宮山会長）
おはようございます。
委員の皆様方には、ご多忙の中をご出席いただきまして、誠にありがとうございます。
また、先月末から一昨日、12日まで県内各地で開催されました地域懇談会にはご多忙中にもかかわらず、ご出席をくださいまして、誠にありがとうございました。各地域おきまして、様々なご意見、ご提言をいただきました。この場をお借りして、県民の皆様に厚く

御礼を申し上げたいと思います。
　各地域の懇談会等でも、非常に貴重なご意見を頂戴しておりますが、そういったご意見等を踏まえまして、この後ご審議を進めていっていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　本日は、お手元に資料が届いているかと思いますが、前回の活発なご議論等を踏まえまして、私のところで、いわば計画の骨格にあたるといいますか、この大綱の案を作成してみました。本日は、お手元のこの資料に基づきまして、ご審議をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　それでは、早速ですが、審議に入りたいと思います。
　本日の議題は、長野県中期総合計画仮称の策定について、この大綱の案でございます。それでは、まず最初に、資料につきまして、事務局から説明をお願いしたいと思います。

（岩崎企画課長）
（資料１から資料７に基づき説明）

（小宮山会長）
　はい、ありがとうございました。
　本日は、この大綱の案について、ご審議をいただきたいと思いますが、これまでのご審議を経て、若干修正した部分もございます。それから、新たに加わった部分もございます。それから、本日この後、ご審議いただくわけですが、まだ空白になっている部分等もございます。例えば、基本目標、これは、今日ここでお決めいただけたらと思います。それから重点テーマ。これについては、前回までにも折々にこんなのはどうだろうというのは挙がっておりましたが、この点をまだ集中的にご審議いただいたことがないかと思います。このへんも、本日、よろしくお願いいたしたいと思います。
　それでは、全体につきまして、ご質問でも、それからご意見を、お願いいたしたいと思いますが、いかがでしょうか。
　はい、古田委員、どうぞ。

（古田委員）
　大綱の案の４ページの「（６）公共の担い手の多様化と役割の増大」のところの書きぶりですけれども、私の認識では、市民による主体的な、ＮＰＯ的な活動というのは、公共の活動ではなくて、公益に寄与する民間の活動ではないかと思います。そこで、概念として、民間の公益活動と、それから最後にありますように行政とのパートナーシップの構築というような書き方はいいと思いますけれども、公共の担い手として、ＮＰＯに期待をしていく、あるいは２行目にあるように、公共的サービスの提供の役割を担っていくものとして、新しい主体に期待していくという書きぶりになりますと、かなり誤解を与えるものになるのではないかと思いましたので、ちょっと書き方を変えていただいたほうがいいのではないかと思います。
　次に、逆戻りしてすみません。「（５）価値観・ライフスタイルの多様化」ですけれども、全体を通しますといろいろなことをここで書かなければいけないということがあると思い

ますが、その価値観、ライフスタイルの多様化に対応して、何かをしていかなければいけないということを書かなければいけないのではないかというのがひとつあります。

この多様化というのは、ここに書いてあることでいいますと、「社会貢献、社会参加への意識」が高まっている。そこで、社会問題もたくさんありますが、その中で「社会の一員としての自覚を持ち、責任を果たしていく社会の実現が求められている。」と書いてあります。

しかし、例えば県民一人ひとりの立場に立ちますと、生涯を通じて教育活動に参加していくとか、学ぶ権利があって、いろいろな知識を吸収しながら楽しく、生き生きと生きていくことができるという部分を、その先に書かなければいけないのではないかと思いますが、社会貢献を期待しているというところで終わってしまっています。

ほかの項目でも、生涯学ぶというようなことを書いてあるところはなく、ここの最後に「生涯を通じた生活の充実を希求する県民意識が一段と高まっている。」とだけ書いてありますが、少し補強していただければいいのではないかと思います。

次に、「（４）安全・安心や環境に対する意識の高まり」というところですが、私の関心からいいますと、その食の問題について、どれくらい書いてあるかなというところですけれども、わずかに、「さらに」という段落のところで、食の安全の確保ということだけが書き込まれています。けれども長野県にとって資源としてもそうですし、ひとつの宝物として、おいしいものであるとか、食の問題というのは非常に重要だと思いますし、また健康長寿の県でもあることもありますし、それから、子どもたちの教育の基盤になることとしても食育というのもあります。ですから、少しこのへんは補強していただいて、これですと、農産物の安全性の確保だけみたいな感じがしますので、食育であるとか、資源になるような、すばらしい食を残していく、伝統食のこととか、何か少し付け加えていただければと思いました。以上です。

（小宮山会長）

はい。非常に適切なご指摘だと思います。特にこのライフスタイルのところは、先生のご専門になさっておられるところですし、またご指導いただきたいと思います。これについては取り上げたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。どうぞ、北原委員。

（北原専門委員）

三つの広域圏の懇談会に出席して痛感したのですが、やはり、環境と教育というのは、共通して大きな問題として挙げられていました。しかし、時代の潮流のところに、教育のことが入ってない。教育の荒廃、それから産業の人材育成のための教育、環境教育にしろ、教育がすごく荒廃しているという面を、時代の潮流に少し書き加えたほうがいいのではないかと思います。それが１点です。

それからもう１点は、「時代の潮流」の下の枠組みですけれども、「基本的視点」、「基本姿勢」、「基本方向」とありますけれども、非常に分かりづらい。「めざす姿」は、いわば、これからの県づくりの方向で理想像。それは、環境と産業と、それから生活という３本立てていいのですが、その次の「基本的視点」は、「めざす姿」の実現のための視点だと思う

んです。そして「計画推進の基本姿勢」は、行政側の基本姿勢だと思うんですけれど、それと「施策の基本方向」が、グチャグチャになっている感じがします。もう少しすっきりできないものだろうかという感じがいたしました。

（岩崎企画課長）
今、北原委員がご指摘の点は、「基本的視点」と「基本姿勢」、そして「施策の体系」の三つの部分がすっきりしないのではないかということかと思いますが、おっしゃいましたとおり「計画推進の基本姿勢」は県としてこの計画を実現していくために、どういうスタンスで臨むかということでまとめてございます。
それから、下の「施策の体系」は、「めざす姿」を実現するための施策を現実に行っていく施策のくくりになります。そういう意味では、姿勢と具体的な施策ということですので、それを一緒にしてしまいますと、かえって分かりにくくなるかなと思います。

（北原専門委員）
それは分かるんですけども、なんて言いましょうか、こう一つひとつ県づくりの方向、推進、それから施策。視点、姿勢、柱と読んでいると３段階にもなってすごく分かりづらい。
そこで、もう少しすっきりできないものだろうかと、私も少し考えたんですけれど、なかなかいいアイデアがなくて。それは、これからの書きぶりによっても変わってくるかと思いますので、それはいいと思いますが、教育についてはいかがでしょうか。

（小宮山会長）
教育については、細川委員、それから遠藤委員からは、再三ご意見が出ているので、どうでしょうか。教育については、後でご相談しますように、重点テーマにもぜひ挙げたいなとは思っているんですが、やはりその背景に、こういったことを挙げておいたほうがいいですかね。

（細川委員）
あの、県のこういう基本計画の中に、私が描いている教育改革というのは、もう無理だと思って、あんまり発言するのは止めようと思っていましたけれども、私はこの審議会の委員にご指名いただいて、大変ありがたく思っております。今まで県のこういう計画を立てるという、その中の一人として県政のことをあんまり考えたこともなく、むしろそういうものは県の方にお任せ、国にお任せし、自分がいったい何ができるのか、そのベストをつくす分を、一生懸命考え、そして実践をするということでやってまいりました。そういう中で、この審議会の委員にならせていただいて、全然別の立場から県政とか、日本の社会の改革を考える、本当にいい機会をつくっていただいたことを、私は大変感謝しております。
そして、先だって、地域での意見を伺う機会に、大町にまいりまして、地域の方たちのご意見を伺って、ますます私が考えておりましたことは、絶対に間違いないと思うようになりました。それは、どういうことかと申しますと、今、すべての基本は、やはり教育、

人づくりです。環境にしても、生き生きとした産業づくりにしても、安全な暮らし、自然災害の対応とか、元は人間なんです。

その人間が、今、荒廃して自分のことしか考えない。将来の夢や希望を持っているわけでもなく、なんとなくただ生きている。このようになったのは、過去を振り返っても日本の歴史で初めてだと思うんです。だから、最大の危機に陥っている。それに国民がいまだに気付いていない、そこが、最大のポイントではないかと、私は思います。

それで、一人ひとりが、今までは大量生産、大量消費、そして経済第一、利益、効率という、ただそういう目標に向かって、どんどんどんどん働き続けて、そして右肩上がりで、日本はすごくすばらしい国になって、経済的にも発展して、先進国の仲間入りをしたと言って、このままなんとかなるだろうとみんなおごっています。しかし、教育の荒廃なんていうのは、気が付いたときはもう遅い。もう既に遅いのかもしれません。

そういう意味で、発想の転換を本当にしなくてはいけないと思います。だから、県の計画ですから、総花的にならざるを得ないのはもう仕方ないと思っており、私が意見を言っても難しいと思います。私が意見を申し上げたいのは、今必要なのはお国の偉いほうの人たちが一生懸命考えて国の方向を決めるのでなく、地域に暮らす住民が主役になって、自分たちのこの生活を、自分たちの子どもたちを、私たちの暮らしを、どうやってよくするかということを真剣に一人ひとりが考える場を、今まで持っていない。お任せだったんです。税金払えばお上がしてくれる、頼り切って甘えているという構造を、日本はつくってしまったから、活力もなくなってしまった。

自分たちの責任で、自分たちの暮らしを守らなければならないと思ったら、真剣になると思うんです。それによって一人ひとりが生き生きとして、活力が出てくると思うんです。今はもう、そういう活力がゼロです。もう、なんとかなるだろう、自分一人ぐらい頑張ったって、どうにもならない。無力感で、子どもたちが生きる喜びも夢も持たずに、ただ惰性でいってしまって、無関心、無気力な子どもたちばかり。

今までは生産者視点、産業視点、経済視点の世の中をつくってきた。今は、暮らしている住民一人ひとりが主役。生活者の視点で、どうやって地域をつくっていくのかということを、地域の人たちが横断的に集まって、年代の異なる人がみんな集まって、それぞれが自分たちの人生をどういうふうにするか、子どもたちの未来をどうやってみんなで築いていくのかということを、県で話すのでなくて、末端の地域で、そういう住民同士が話し合う機会を横断的につくっていく、もうこれ以外にないのではないか。

そして、親たちは学校にお任せ。全く子どものしつけがなってなくても、先生悪い、学校悪い、社会が悪いと人のせいにしています。

（北原専門委員）

とてもいいお話ですが、ほかにもお話ししたいという人もいらっしゃるので、発言を少し手短にお願いできないでしょうか。

「時代の潮流」の中に、教育の荒廃を入れるべきではないかという私の提案に対して、どうお考えでしょうか。

（細川委員）

それはもう入れるべきだと思います。それはみんな気付いていても、こういう中にはあまりはっきり出そうとしない。この４番に「未来を拓く人づくり」と理想的なことが書いてありますけれども、そういう耳触りのいいことを書くよりも、むしろ厳しいことを書くべきであると思います。

（遠藤専門委員）

この原案ですけども、非常によく書かれていますけれど、長野県らしさとか、どこの県でも同じような形になっており、画竜点睛を欠くという部分がありまして、ここに何かインパクトをつけていただきたい。

今の細川委員のご発言は、背景として、思想として流していただきたい。そうすると、この報告書が魅力あるものになっていくと思います。たまたま僕は、新興著しい国から昨日帰ってきましたが、例えばその国で、今トヨタ自動車と匹敵するくらいのすばらしい自動車を造り出しました。ところが、性能は、なんら違いはないのに、世界の市場では売れない。それが、どこから来ているかというと、その国民的な蓄積、感性、それから教育の成果としての見えない部分の性能が日本車とは格段に違います。そういう人づくりが背景になって、実は奥地に行くと、ごみは道に落ちていますし、人々は平気で路端でつばを吐いたりする。こういうモラルの低さ、社会の非充実性がまだあります。

それが全部、教育に反映されて、その結果、ものづくりの最後、90パーセントまで日本にキャッチアップできたけれど、残りの５パーセントでキャッチアップできない、微妙なところで大きな差を彼らは感じているんです。

それがやはり教育の有形無形の成果なんです。今、細川委員がおっしゃったように、例えば長野ではおじいちゃんもおばあちゃんも出た学校へ孫が行っているというご家庭が結構多く３割ぐらいあるらしい。東京では、お父さんと同じ学校を出ているというご家庭は、まずない。そういう意味では、おっしゃるとおり、教育は学校や家族の話ではなく、社会が教育を支える時代なんです。

そういう素地というか、社会、バックグラウンドを長野は持っている。そういう意味では、もう地域を挙げて、社会を挙げて人づくり。あまり教育の荒廃、荒廃と言うと、これは世界の傾向なので、北原委員のおっしゃっていることはよく分かりますが、もっと積極的にとらえて、長野はすごい人材をつくる、未来を託すすばらしい子どもたちを育てる県だから、子どもの教育のために一家を挙げて長野へ住もうというくらいの魅力がこの地にはあると思います。

例えば、ここはご存じのように国立大学は信州大学だけですけど、私立大学もあまりない。かつてはいい労働力を供給する県として、企業がこの地に生産拠点を持ってきました。ところが今、長野県の生産拠点というのは、中国や韓国と競合を強いられているわけです。そして、今、企業はどういうところへ立地しようとするかというと、いい人材の供給される地点を選ぶ。つまり、非常にハイテクの、高い教育を受けた研究者がたくさんいるところへ、企業は立地するんです。

そうすると、長野は、ある意味で厳しいこのグローバル化の中で、波にさらされています。しかしここで非常にいい人材を提供するという付加価値がつけば、単に与えられた仕事をやるだけの人材ではなくて、もっと提案型の、企業に貢献できる、そういう人材の供

給地としての人づくり、これがあればまた違ってきます。
　愛知県では高卒の生涯賃金は、大卒の生涯賃金より高くなっています。ですから、高卒でも、非常にクリエイティブな人材が供給されて、そして企業に貢献できる人がいれば、そこに企業が来ます。そういう人づくり、それから今まで培われてきた信州の独特の教育に対する県民意識、こういうものをここに少し盛り込んでいただくような、ちょっと核がほしいと思います。
　非常にいい、立派につくっていただきましたが、ひとつのインパクト、それから、思想的に細川委員や北原委員がおっしゃったようなことをとうとうと流していただければ、自慢できるビジョンの策定になるような気がします。具体論ではありませんが、そんな感じがしました。

（小宮山会長）
　北原委員、例えば教育への期待の高まりという潮流があるというような形ではだめですか。といいますのは、少なくとも高等教育に関係している限りですが、今は経済理論だけで教育を考えようとしています。これはもう、教育の荒廃なんです。けれども、少なくも、その人づくり、例えば授業内容とか、教育内容というのは、我々なりに工夫をして、過去よりも一段と充実した教育をしているわけです。そういう意味では、少なくとも荒廃は、私はしてないと思います。ですから、初等教育から始まって、この期待感がすごく高まっているというような形ではどうなのかなと思ったのですが。

（北原専門委員）
　要は、時代の潮流のところに教育の記述が一つほしいと思っているのですが。

（小宮山会長）
　特に、知識基盤社会を支えるとなると人づくりでしかないわけで、教育しかないわけです。そういうときに、経済理論だけでやってはいけないということを出したいんですが。少なくも期待が高まっているということでどうかなと思ったのですが。樋口委員が、今手をお挙げになられましたが、このことでいいですか。

（樋口専門委員）
　関連してですが、遠藤委員のおっしゃったことに賛成です。北原委員にも関係しますが、基本的視点のところで「長野県らしさ」という言葉が書いてありますが、何も言ったことにならないと思います。やや、独りよがりの議論になってしまうおそれがあるので、もしここを構成上、何かクローズアップする必要があるのであれば、むしろ具体的に、例えば人づくりの問題を書いてはどうかと思います。
　地域懇談会等に出させていただいて私が特に痛感しましたのは、この言葉に象徴されているのですが、ある種の長野県の人たちだけの世界、クローズドシステムというのを少し感じております。せっかく、オリンピックもやったわけですから、今後、長野県の潜在的な力を出していくためには、幅広く人材を受け入れて、世界の人たちが長野県に来て、産業の分野なら産業の分野で、新しい産業に参加し、あるいは教育を一緒にしてという意味

で、開かれた長野県、国際的にも開かれた、そういう方向性というのをきちっと出していかないといけないのではないかと思います。
　それを「長野県らしさ」という言葉では、具体性があまり浮かび上がってこないので、これは私の提案ですが、魅力ある地域の魅力をさらに高めるために、例えば、オリンピックやスペシャルオリンピックスの成果を生かして開かれた地域づくりをしていくとか、ある程度具体的に目標を書いたほうがいいと思います。

（伊藤委員）
　今のご意見それから資料の「時代の潮流」を拝見していて、子どもたち、子どもという言葉が、ほとんど出てこないといいますか、教育とか人材という言葉は出てきても、自分たちの意見を言えない、県民満足度調査の対象にもならない子どもたちの将来のこととか、産んで育てていくというようなことについて、この時代の潮流の中からも、子どもが減るから無視されているような印象があるならば、教育というような視点の項目の中でもいいと思いますが、もっと、子どもたちがどう守られ、はぐくまれる県なのかというところを、子どもたちをどう考えていくのかという視点は、入れていただけるとどうかなと思っています。

（小宮山会長）
　ひとつの案として重点テーマに挙げてみたのですが、特に少子化社会においては、この子育て、子ども、それから教育、そういう観点は非常に大事だと思うので、今のご意見は非常に重要なご意見だと思います。
　それでは、先ほどの樋口委員のご意見について、「長野県らしさ」とよく言ってしまうんですが、原案のままだとその中身が見えない、もう少し見える形にしたらいいのではということですが。

（樋口専門委員）
　もちろん皆さん、全部この基本視点のところに入れたいということだと思うんですが、もし基本視点を生かすなら、やはりこの審議会でメリハリをつけて、何を重視するかということを、三つ、四つ選んだほうがいい。そうでないと、北原委員がご指摘したように、構造が分かりにくい。
　なぜかというと、この「基本視点」のところは、非常に抽象的なタイトルになっていますので、「県民の総合力で進める」とか、「長野県らしさ」を生かした県づくりというのは、抽象的で人によってとらえ方が違ってきます。まとめるためにやむを得ないという点はあると思いますが、できれば今議論が出ているようなものの中から、柱を選んだ方がいいと思います。
　私はできれば国際交流であるとか、開かれた長野県というもの、あるいは他地域との交流とかを積極的に推進するということも、一つの項目としてあったほうがいいと思います。これは、私の個人的な意見ですが。
　全体として、ここの柱立てのところのタイトルを少し工夫できないかなと思います。

（滝澤委員）
先ほどの、教育の「時代の潮流」の関係は、私も会長のご意見に賛成です。
教育の荒廃は結果であって、潮流ではないと思うんですね。やはりその教育に向けた期待というような観点で、盛り込むのが適当ではないかと思います。
それから、もうひとつ、今の議論の関係ですが、従前からのイメージでいったときには、基本視点で七つ挙がっていたものを、今回、「めざす姿」と「基本的視点」に分けたわけですが、読ませていただいたときに、こうしたことによって私は逆に非常にすっきりしたと思いました。
「めざす姿」は将来のイメージ、それに対して、「基本的視点」というのはそれをつくっていくときに、どういうスタンスで臨むのかという観点でつくられたものだと思ったので、その意味ではすっきりしたと思いました。
ただ、その問題と、先ほど出ておりました「計画推進の基本姿勢」という後に付け加わったもの、これも僕は非常にいいと思いますが、これは行政に対するひとつのしばりというか姿勢です。だから、そういう意味で僕は非常によかったと思っていますし、地域の懇談会でも率直に、「県は本当に言ったことはやるんですか」というような意見が出ていたような感じもありましたので、そういう意味で、行政自身が自らにこうきちんと姿勢を、しばりかけるという意味で、ここに挙げられている姿勢は、やはりきちっとこの中にうたうべきだろうと思ったので、そういう意味で僕はすっきりしたなと思いました。
ただ、先ほど少し議論が出ている関係で、確かに少し分かりづらい側面があるのかなと思うので、そのへんはちょっと修正していただければと思います。

（花岡専門委員）
今の問題に関連して、北原委員から、重層的になっていて少しごちゃごちゃして分かりにくいのではないかという意味から少し申し上げたいのですが。
これは私の考えですが、資料３の７ページの（２）の見出しでは、何が基本だか分からないし、少し硬い。この「基本的視点」というのは、「共通の認識」という題でどうかなと思います。
それから、10ページの第３の「計画推進の基本姿勢」は、もっと柔らかく、取組の姿勢ということであるので、項目的には第３として打ち出すのでなくて、「計画の基本方向」の中でもいいのかなと思います。少なくとも「計画推進の基本姿勢」は、「取組の姿勢」という形で表現すれば、基本が幾つもあって分からないという部分は解消されていくのかなと思います。
それから、もう１点。先ほども少しご意見もありましたが、少子高齢化というか、特に人口減少が時代の潮流として非常に大きな潮流になっています。それを世の中の流れとして、素直に受け止めていくということは、もちろんやむを得ない部分もあるんですが、地方公共団体において、人口減少対策として何が行えるかというと、子育て支援とか、Ｉターンみたいなこともあると思いますが、大きな施策はなかなか取りにくい。しかし、私は、人口減少に対して県としていろいろな形で取り組んでいく姿勢は、この計画の中にあっていいと思います。
部分的には子育て支援を始めとして出てはいます。出る場所としてどこがいいのか分か

りませんが、「重点テーマ」というのがありましたので、その中で、人口減少対策みたいな項目をセッティングして、各部局で何が行われるのか、そういうものを明らかにしていくことがいいのではないかと思います。

今後、それぞれの都道府県なり市町村が、そういうところを自前で努力していく時代になってまいりますので、地方公共団体においても重要な施策のひとつになっていくということで、最低でも重点テーマのところへは、そういう項目でくくって整理されるのがいいのではないかと思います。

（横道専門委員）

とりあえず二つほど。一つは、今のお話を聞いていまして、教育の荒廃とかの問題がありますが、今まで計画というのはどちらかというと、夢ですね、こういうことをやりますよという明るい未来でした。だけど実際には、現場では荒廃とかですね、先日、私も地域懇談会に行って、改めて感じたんですが、環境を保全すればシカが増えて、サルが増えて、鳥獣対策で実は大変だということが起きている。上は、明るい未来でいいんですけれど、施策とか具体的な事業は、この審議会の外、資料２の一番下になると思いますが、そういうところにもしっかり手を打っていくということを考えていただきたい。明るい、明るいばかりで、そういうところを見ないでいくわけには、たぶんいかないと思いますので、押さえていただきたいというのがひとつ。

それから、もう一つは、これは言葉の問題なんですけれども、11ページの４の「政策評価による計画の推進」の最初の○の最後ですけれど、言っていることは、いいと思いますが、「進行管理」という言葉がいかにも古い。「進行管理」というのは、素直に読めば、決まったことをずっとやってしまうという硬直的な感じがします。最近は「目標管理」です。目標を定めて、それに対して、このサイクルで到達しているか、どの程度してるか、してなければ見直して、できていないところは見直していかなければいけないという、「目標管理」と用語に替わりつつあります。そこはほかの言葉でも結構ですが、「進行管理」と言われると、なにかもう一旦決まった事業をずっとやってしまうというような、硬直的なイメージになってしまうのでそのへんを検討いただければと思います。

（伊藤委員）

理想である「めざす姿」を拝見したときに、これはあるべき姿であって、目標として理想として、みんなが見たときに夢が持てたり、明るい未来をというお話もありましたが、同時に大きな目標とか、目指すものを明確に持つことで、一番最初のこちらの審議会の中でも、具体的な目標の設定もあってもいいのではないかというお話があったように記憶をしています。私はいつもニートやフリーターやうつの現場にいるので、どれだけ土台のところで踏ん張らなければいけないかというところにいますので、この３本柱の環境、産業というところで、私が拝見して、この最後の暮らしの部分というか生活の部分に、医療も教育も子どもたちのことも、残り全部を詰め込んでしまったような形があって、３というような数字で分かりやすくまとめる必要性と、なにか全部一緒に詰め込んだから、あとは重点項目にして、そこでやりますからよろしくというような感じでいいということとは逆に、ここではっきりと将来の形として、次の世代をこの５年でどうしていくのかという、

教育や子どもたちの問題とかをきちっとここにも出したほうがいいのではないかなという気持ちもないわけではありません。

もう一つは、その、「めざすべき姿」というところに、先ほど樋口委員からクローズではなく、国際的に開かれたというお話がございましたが、私も最初提言を考えさえていただいたときに、世界から注目される、世界の人たちが来たくなる、そういった知的なものがあったり、環境があったり、人がいたりという地域を目指していくという意味で、例えば「世界一高齢者が元気な地域」だとか、「世界一自然と共生を果たしている長野県」であるとか、「世界一女性が活躍している県」であるといった、目指すものがあってもいいのではないかと思います。

こういう言い方が適切かは分かりませんが、いわばそれは誇りであって、地域に暮らす人たちが、そういったものの考え方で、理想の目指す姿を出すことも、ひとつぐらいあってもいいのではないかなと感じています。

（小宮山会長）

三つぐらいで、コンパクトでいいというご意見もあるんですが、もうひとつ、ちょっと隠れてしまう部分があるということですね。分かりました。

（若林委員）

私、全体的にはこれでいいと思いますが、ひとつだけ。

環境問題を論じるときにですね、先ほども少しお話が出てきましたが、有害鳥獣の問題をどう考えるか、有害鳥獣ととるのか、自然ととるのか、そこのところが今、全体に係わる部分として重要な視点になってこようとしています。

世界的な環境保全という視点から見たときに、鳥獣との共生の部分をいったいどういう視点で、またどういうレベルでつかむかということによって、大変違ってくると思います。

言葉では非常にうまくは入るのですが、具体的に、それではどうするのとなってきたときにですね、そこがもう悩みの点なんです。

私どもも、農業関係のところでも論議をしているんですが、たぶん最終的にはこのことが非常に大きい課題になるものですから、いい考え方、ご意見があれば、教えていただきたいという立場で、ちょっと発言させていただきました。

（小宮山会長）

北原委員。先生の周りには専門家がいますよね。

（北原専門委員）

環境にダメージを与えすぎているような場合は、農林業にすごいダメージを受けていますから、適切な数にコントロールを人間がするしかない。それは具体的施策のほうに入ると、私は思います。

３本の柱の「いきいきとした人の暮らしを育む長野県」は、長野県民であればどなたでもそういう暮らしができるということですが、こういうところに一項目入れてもいいですし、そのイの「力強い産業が支える活力あふれる長野県」の中に、一言入れておいてもい

いかなとも思います。
　限界集落の問題も以前ありましたけれども、せっかく丹精込めて作った農作物を、追い打ちをかけるように食べられてしまうというのは、すごく大きなインパクトになっていますので、「めざす姿」に入れるべきなのかどうか分かりませんけれども、やはり一言ほしいと思います。

（小宮山会長）
　これは、主要施策の中に取り込む。そのあたりでいいのかなと思いますが、松下委員、どうぞ。

（松下委員）
　北原委員が最初におっしゃられた、少しごちゃごちゃしているというのは、私も同様な見方をしておりました。ただ、これはどうすればいいのかというのは、今すぐには私も申せませんので、少し時間を掛けて整理していただけるとありがたいなと思いました。
　それで、少し気が付いたことだけ、お話しさせていただきます。
　資料３の「第２　計画の基本方向」の（４）に「安全・安心や環境に対する意識の高まり」という項目がございますけれども、今日の資料の７に県政世論調査結果がございまして、トップが「『安全・安心』な生活ができる」57.3パーセント、「『環境』を大切にする」46.4パーセントとこの二つにかなり高い意向が出ているわけですが、それをここの、「安全・安心や環境」という三つに、並列してしまっていいものかどうかということが、少し気になります。
　前回の審議会の議論の中には、かなり環境というものを特出しする、あるいは重要視するという意見が強かった気がするものですから、この扱いを少しご検討いただけたらと思います。
　それから、２ページの（１）の少子高齢化のところに少し言葉不足なところもあります。最後の「長野県では」というところに、現在の動向は書いてありますが、先ほど伊藤さんも言っておられましたように、長寿県とかですね、それに伴う長野県の誇りと言ったらおかしいですが、そういうものも潮流といったところへ出してもいいのではないかと思いました。
　それから、「これからの県づくりの方向」で言わなければいけないのか、どこへ出てくるのか分かりませんが、例えば「恵み豊かな自然と生きる長野県」のあたりに、環境に対して長野県は先進県を目指すというような姿勢をどこかにうたえないのかなという気がしました。
　それから、その次の（２）の「基本的視」点のところですが、先ほど貴重なご意見があったように、ここにもう少し具体的なことが入ってきていいのかなと思います。このイのところに、「持続可能な県づくり」ということが、標題に出ております。前回、私が少し建設産業のジャンルでご提案申し上げましたように、今まではスクラップアンドビルドを繰り返してきました。これは、長野県ばかりではないと思いますけれども、やはり違う方向を目指していくということ、新しい視点として長野県らしさを発揮した県づくりを目指すと、それがまた新しい雇用を生むというようなことも含めて必要であると思いました。

もう少し分かりやすく言えば、維持する、あるいは再生していくという基盤整備の新しい視点を入れていく。今までのように、そういうことを無視してものをつくっていくという姿勢そのものを改めていくべきであって、これは今の日本中にも当てはまりますし、かつてはヨーロッパもアメリカも、みんなそういう道を歩んできているわけです。ですから、それは、この長野県が真っ先に率先してですね、維持再生というものを前面に出した県の施策をうたっていくことが大事ではないかと思いました。

これは、「これからの県づくりの方向」の「めざす姿」のイの「力強い産業がささえる活力あふれる長野県」との整合性、それと先ほどの（２）の「基本的視点」のイの「持続可能な」というのは、この問題ばかりではないと思いますけれども、どちらかというと相反する二面性を持ったものです。これにどう長野県がチャレンジしていくかという、ひとつの大きな方向性を示すものになるのではないかと思っておりますので、そのあたりを議論いただけたらと思いました。

長くなりましたが、基本目標という、資料４の案に関しては、私なりの案を考えてまいりましたので、後ほどご披露したいと思います。

（藤原委員）

全体的に見まして、この大綱の案については、よくできていると思います。総合計画ですから、バランスも考えなければいけないので、ひとつだけ、先ほどから問題になっております教育の問題です。確かに、地域に入ってみますと、教育というものは非常に大事で、しっかりした人材があれば産業も興りますし、しっかりした福祉もできます。我々が、今、自治の前線にいて一番必要と思うのは、やはり、知識より知恵というものが非常に重視されます。

ですから、知識偏重の教育でなくて、やはり知恵をある程度つくり出すような教育、極端にいうと、その地域の文化や風土や歴史や自然を使いこなせる人材が本当の地域の教育だと思っています。ですから、教育再生のためには、やはり地域から人を起こすということが大事でありまして、小宮山会長さんもおっしゃいましたが、そういう教育はやはり、教えはぐくむという教育の時代ではなくて、ふるさとをつくる、育てる「郷育」、そういう字に変えたほうがいいんのではないかと、そういう提言もしましたが、やはり地域というのは、人材が大事でありまして、ふるさと教育にはやはり、知恵を大きく育てる教育も非常に大事ではないかと思います。そのへんのところを、できれば強調していただければと思います。

それから、安心、安全でありますが、非常に国際化も進んできまして、他国の人たちも多く来ておりますし、また国内も教育の関連もありますが、非常にいろいろ犯罪とか、そういうものが多くなってきておりますので、やはり安全という中には、治安の問題もあります。ですから、防犯、防災のためにも、消防力の増強とか、警察力の増強とかというものを、これは個別計画でもいいと思いますが、そういうようなものもしっかり担保して計画を練ったらと思います。

（平尾委員）

私も地域懇談会に２か所行かせていただいて、大変参考になりました。下伊那と上伊那

に行ったんですが、皆さん非常に熱心にお話をいただきました。こういう問題もあるのかというようなことで、大変啓発される部分も多かったんですが、そういう熱心な皆さんの発言の背景に何があったかというと、先ほどもどなたかおっしゃっていたと思うんですが、「県は本当にやってくれるの」という、やってくれないから、私がここまで言わなければいけないんじゃないのというニュアンス、ここまで言わせないでよっていうようなところも、ちょっと感じました。要するに、現場と県との間の、その信頼関係というのが、本当にあったのかな。あるいは、ないとすれば、この基本計画の中でしっかりと形づくっていくというのが、非常に大きな役割だったというふうに、まず思いました。

それで、そんなことで考えてみると、先ほど政策評価のあたりのところを、非常に的確にご指摘いただいたように、目標管理とすべきで、プランをつくって、それでドゥがあって、そこでチェックをして、さらに改善していくという、そのサイクルが回らないと、市町村と現場と県の信頼関係は、たぶん形成されないんだろうなと思います。ですから、これは非常に大事なことだというふうに思っています。これをきちっと基本姿勢の中に入れていただいたということは、極めて重要なことだなと思っております。

そういうことで、大綱案を見てみますと、やはりまず掲げるべきものが何かということで「めざす姿」、それから「基本的視点」、それから「基本目標」、これもどなたかご指摘になったと思うんですが、ちょっとごたごたしているなという感じがいたします。これは、いくつかに絞ってすっきりさせて、これを目指すんだというふうにしていくべきで、その下にある、「施策の基本方向」は、これはたぶん方向を確実に実践していくための戦略的な展開だと思います。

ですから、ここのところにはもう予算の裏付けをしっかりとつけて、市町村とどのように実行していくのか。要するに、その評価に耐えられるような戦略が、ここに盛り込まれていかないとまずいと思います。

そういう、目標があって、戦略があって、それをサイクルとして回っていくということを考えた場合に、私自身はよく、いろいろな経営の分析でＳＷＯＴモデルというのがあって、弱いものを強く、強いものがより強く、驚異を機会に変えていくというような、いい方向に、いい方向に、こう変えていくというのが、基本的なマネジメントの姿勢ということになると思うんですが、私自身の感覚でいうと、この「時代の潮流」の長野県の位置付けというのは、すごく甘いような感じがします。もっと、厳しさがあってもいい。これは、単に経済的な落ち込みだけではなくて、例えば不登校が多いとか、それからいじめが多いとか、教育の荒廃につながるような、細川先生が絶えずおっしゃっているようなことを裏付けるようなデータが、たくさんあるわけですね。まずは、そういう厳しいところを、相当強く認識していくことが、非常に重要ではないかという感じがいたします。

そのことで考えると、この「時代の潮流」、それから長野県の位置付けということについては、私はもっと厳しく、あるいはもっとメリハリの効いた表現を、ここでしておいたほうが、ここまで県ははっきりと認識した上で目標を掲げて、戦略展開を考えて、それをチェックして皆さんとともに歩んでいくんだという意識がはっきりと出てくると思うんです。

ですから、スタート地点での認識が、私はまだちょっと甘いのかなという感じがしています。確かに、教育は大事ですし、荒廃もしているのですが、では、その次の具体的な展開の中で、どういう教育、人材が必要なのかというところも、ある程度頭に描きながら教

育の荒廃を指摘していかないと、単に教育が荒廃しています、一人ひとりが輝いていませんという話だと、目標の連鎖、目標管理にならなくなってしまうと思うんです。そのへんの掲げるべきものと、具体的な戦略の整合性というのも、やはりある程度イメージをしておかないと、このＰＤＣＡが回らなくなってしまいます。

したがって､弱いものを強くする､あるいは強いものをさらに強くしていくという形で、その計画性がちょっと持ち得なくなってしまうのではないかなという印象がございます。全体としての整合性は、非常によくできているとは思いますが、私の立場で見ると、現状認識はもっと厳しくあるべきではないか。長野県の輪郭を、ここでしっかりと提示しておくということは、今日の新聞にも道州制は８年から10年後というような、そんな数字も出ておりましたけれども、そういう道州制の中で、長野県がどういう輪郭を持って、外にアピールしていくかということにはならないのではないか。少なくとも、このくらいの現状の認識では、この道州制の議論の荒波の中で、長野県というまとまりが、しっかりとしたまとまりとして維持できるのか、そんな感じもいたしました。そのへんを、もっと書き込んでもらったほうが、むしろいいと思います。

（小宮山会長）

はい、ありがとうございます。

今回の案で、基本的には大体よろしいだろうということですが、かなりいろいろなご意見をいただいたと思います。「時代の潮流」に、教育の部分を入れよう。それから、今の平尾委員のご意見ですが、全般的にもっと厳しくしたほうがいいのではないか。それから、「県づくりの方向」、「めざす姿」、「基本的視点」、「基本目標」の、特に最初の二つ、それからその下に出てくる「計画推進の基本姿勢」、このへんがもう少し分かりやすくできないだろうかというご意見がありました。この点については花岡委員からは、こんなことではどうだろうという対案もいただいております。これらについては、また検討したいと思います。

それから、「めざす姿」は三つにしてしまうと、インパクトが落ちるんじゃないか。もっと子育てとかの面を出したらどうか。それから、現在の「基本的視点」に、長野県らしさについての表現をもう少し工夫したらどうかというようなことも出ておりました。

それから、全般的にメリハリをつけたほうがいい。例えば、環境でしたら先進県というのも出ております。それから世界一何々というのも、非常にメリハリがついて分かりやすくなる。明るい目標というか、目指すところをもう少し明確にしたらどうだろうかというご意見をいただいたかと思います。要約すると、こういうことでよろしいでしょうか。

（細川委員）

特に教育で、これからどうしたらいいか、具体的な案のひとつですが、先ほどお話ししたように、コミュニティ、つまり学校に任せるのではなくて、地域の子どもたちは地域のみんなで育てるという、教育委員会に縛られた教育の中で、学校の中で、閉鎖された学校で先生が教えのではなく、大人、おじいちゃん、おばあちゃんの知恵、地域のみんなの知恵で子どもたちを育てるという、具体的なこともしていただきたい。

事実日本で、東の三鷹、西の京都と、これをもう始めて、コミュニティスクール、コミ

ュニティソリューションでやっている地域があって、大成功しています。
　是非、長野は日本一のこのすばらしい地方で、都会に負けない地方らしさを生かした、日本一のコミュニティスクール、コミュニティソリューションの社会をつくっていただきたいと思います。

（小宮山会長）
　はい、そうですね。
　それから、横道委員からいただいた字句の修正というか表現、それから古田委員から冒頭にご指摘いただいた点はもっともだと思いますので、ご意見を参考に表現を変えたいと思います。
　はい、松下委員、どうぞ。

（松下委員）
　今の細川委員のご発言に関連してですが、「第４　施策の基本方向」の（３）の「生き生き暮らせる安全・安心な社会づくり」に、少しそういう横断的なことが書いてあるわけです。ここに、より一層分かりやすくするために、コミュニティ、あるいはコミュニティの育成というような項目をつけますと、例えば災害が発生したときにも、そのコミュニティが役立つとかですね、安心して子どもを育てる環境としても、分かりやすいと思います。ちょっとそんな表現もここへ加えられたらいかがでしょうか。

（滝澤委員）
　すいません、１点だけお願いしたいと思います。
　先ほど議論したんですが、第３の２の「市町村が主役の分権改革」を見ますと、確かに市町村が主体だというのはいいんですが、それでは県の主体性はどうなのかというところが、少し明確でない。どこまで書けるのか私もよく分かりませんが、これをみると市町村が主体で県は支援をしますという役割分担があって、それで県の施策を打ち出しているとすると、なにか非常に県の主体性というか、県の責任はどこにあるのみたいな感じがどうしてもあります。先ほど出ていた民間との役割分担の問題とか、県と市町村の役割分担の問題だとか、前回鷲澤委員も県と市町村の線引きがという意見も出ていたので、そのへん、どういう言い方になるのか分かりませんが、もう少し工夫ができないのかなと思います。

（小宮山会長）
　はい、分かりました。
　ここでひとつ空白になっている部分ですが、先ほど松下委員も触れていただきましたが、この基本目標をキャッチフレーズ的に出そうということで、こういった基本的な我々の姿勢というのか、目指す姿といいますか、このあたりを短く表せないかということで、資料の４に、これをひとつの案として出しました。委員の方々それぞれいろいろご検討いただいたと思いますが、参考までに私の案を配っていただいて。（会長私案を配付）私は例１にならって、基本的には環境問題、水、こういうものが前面に出ていたので、これをまず出して、そして安心、生き生き、そしてみんなで信州をつくっていくんだという意味で、私

は「水と緑豊かな　あんしん　いきいき　みんなの信州」というように、これをみんなでつくっていこうというものを考えてみました。

（松下委員）

私は、あの、この四つの例を見まして、また今、小宮山会長のいくつかを見ましても、やはりなんとなく今までの多様なことが一言で表せていないのかなと思いまして、ちょっと提案しますので、たたいていただきたいと思います。

私の案は、「だれもが、幸せを実感できる．いきいき信州」です。これも総花的であったり、ちょっと抽象的であったりするかもしれません。解説いたしますと、ここへなぜ「だれもが」と入れたかというと、今、いろいろな格差が生じています。地域間格差であるとか、社会的な格差の問題、あるいは長野県内でも北高南低というような、善光寺平や松本平に比べると、伊那谷の方の非常に脆弱な基盤にある地域とか、経済格差の問題はもちろんあります。

今のような脆弱な地域に生きている人たちは、そういうところで少しくらい貧しくても生き生き生きていけるとか、生きていきたいというようなものを感じている人たちがいます。それと、もうひとつ、情報格差みたいなものもありますけれども、あるいは年代間の格差みたいなものも当然あると思います。そういうものを、総括するという意味で、「だれもが、幸せを実感できる」としてみました。

それから、「幸せを実感できる」ということの中には、今までここで議論されてきたすべてのものが入ってくると思います。「これからの県づくりの方向」という中の、豊かな自然であるとか景観であるとか、美しい風景であるとか、あるいは何気ない風景であるとか、そういうようなもの。あるいは伝統、あるいは文化、そういったもの。さらには長野県の厚い人情味、こういったものも入ってくるかも分かりません。それから、気候風土に生かされた個性的な産業、こういったものも入るかも分かりません。安心して、子育てや教育のできる環境、こういった様々なものを表現できるのかなということで、「幸せ」という言葉を使いました。

昔はですね、都市と農山村を対比するときの言葉で、よく真の豊かさというような言葉が使われていた時代があると思います。例えば豊かさを実感できるというふうに言ってもいいわけですけれども、今の時代には、その豊かさという表現では言い表せないのかなとことで、私はあえて幸せということをここへ挙げてみたんです。これが、長野県の県民に対しても、あるいは県外に対してもキャッチフレーズになる極めつきの案だと思っておりますので、よろしくご審議をお願いします。

（松永専門委員）

県から出していただいた４案を見て、感じるのは二つあると思っていまして、一つは、長野県としての特色とかメリハリが本当に出ているのかという点が１点。もう一つはフレーズが、やはり短すぎてですね、今まで審議してきた教育であるとか人づくりといったところまで、盛り込めていないのではないかという点を感じています。

まず、メリハリという面では、一番最後に信州とありますが、これをほかの県に置き換えても同じようだというものでは、信州の特長にはならないのではないかと思っておりま

す。この信州を置き換えても、例えば、徳島県とか、青森県にしても高知県にしても、みんな同じというものではやはり、審議してきた意味があまりないのではないかと思っております。そういった意味で県のほうから出したトレンド３の活力というのは、こういう格好がいいのか、もっと具体的に雇用、所得というふうには書けないと思いますけれど、そういう方向がいいのか分かりませんが、教育の問題、あるいはこれまで審議した産業施策であれ、もう少しこのフレーズ自体を長くして、ほかの県に置き換えられないようなものにしたほうがいいと思っております。

それから、もう１点、これはだれを対象にしたフレーズなのかということですけれども、私は、大綱案を読んで感じているのは、今、住んでいる長野県の人、特に意見を言いやすい中高年の意見に引っ張られているという感じを若干持っております。しかし、本当に魅力ある長野県にするとすれば、我々が、次世代に何を残していくのかとか、次世代の教育の問題もそうですけども、これから社会人になる、あるいはこれから本格的な教育を受ける、あるいはこれから生まれてくる、あるいは他県から移住してくる、あるいはその海外から観光で訪れる、そういう人たちにとって魅力的な、次世代にとって魅力的な、そういった基本目標にしたほうがいいのではないかと思っております。

（有吉委員）

私も、こういうフレーズはすごく難しいと思います。コピーライターとかプロの人だと、なにか極めつけの言葉が浮かぶかもしれないんですけど、私としてはやはり、松下委員には申し訳ありませんが、あまり主観的なものは入れないほうがいいと思います。

安心、安全というのは、ある程度客観化できるものだと思うんですけれど、幸せというのは主観なもので、それぞれの感じ方が違うので、それを県の目標としてしまうと、路上生活している人は「ほっといてくれ、これが幸せなんだ」って、そういう幸せを感じているかもしれないので、主観的なものではないほうが分かりやすいと思います。

（小宮山会長）

上を、ある程度受けてきて、今回のこの基本計画の姿勢といいますか、それを要約して、なにかキャッチフレーズ的に出せないかと思ったんですが。

（近藤委員）

今のお話、私も同感です。幸せだとか、今、美しいというのもありますけれども、そういう意味で言うと人によって、確かに、様々な感じ方があります。いろいろな議論をつなぎ合わせてみると、議論のひとつの方向性とすれば、環境を基本にしようというお話もございました。確かに、いろいろなご意見があると思います。これだけ並べられ、どれを選ぶかって言われると困るんですけれども、私は、この例題といいますか、会長がお配りになられたものも含めまして、そこでやることもひとつの方向ではないかなとは思いますが、いろいろ議論し出すとなかなかこれは決まらないので、アンケートでも採る以外難しいと思います。

（平尾委員）

ひとつ、これは全部信州という言葉ですが、これからの時代を考える場合に、信州という言葉がいいのか、文字どおり長野という言葉を使ったほうがいいのかというのは、これは実は大問題だと思います。

ヨーロッパなんかに行くと、「ナガノとナカタは似ているね。」と言われますが、信州というのは全くだれの頭の中にもありません。こういう国際化、グローバルの中で、信州という言葉にどこまでこだわるか、こだわり方にもいろいろあると思いますが、長野県の観光が「さわやか信州」でずっとやってきたんですが、あまり効果がなかった。具体的な戦略が伴っていなかったということもあるんですけれど、私は若干、その信州にあえてここまでこだわる必要があるのかなと思います。私は、今のお話のように次世代に何を残すか、どういう長野を残すかということで考えたほうがいいという感じがします。

長野にするか、信州にするかという議論を、まずしていただいたほうがいいように思いますが。

（伊藤委員）

私、意見聴取をしていただいた一番最初の段階で、基本目標をそのとき提示しているんですが、こちらに載せていただいてなかったので、お伝えしてもいいでしょうか。

一番最初の段階のもので非常に危機感を持った基本目標なので、今、これと並べると、なんだ、そんなことはあり得ないというお話かもしれないのですが、一応申し上げますと、「土台再構築、飛躍の力、生きる力をはぐくむ国、長野」と、そのときはご提示をしました。それは、環境も人材も、そして産業も生活の場も、土台を再構築しなければいけないような危機感を持って、長野の未来を考えるべきではないかという気持ちがあったからです。そして、「生きる力」というのは、先ほどの古田先生の食の問題もそうですが、教育の荒廃という話もあったんですが、一人ひとりが働く現場でも、生きる力を取り戻して長野県で生きていくことが幸せであるような、そんなものをまたはぐくんでいける国であってほしいという思いを込めました。それと同時にそこから次へ向かって飛び出していけるような、そういう力強さを持ってほしいので、「飛躍の力、生きる力をはぐくむ国、長野」というふうに、意見聴取のときには基本目標として提示させていただきました。

それは、あくまで環境とかそういうことではなく、人に焦点を置いた、ここに生きている人に焦点を置いた目標というものが、今大事なのではないかというふうに思ったので、また皆さんのご意見の参考にしていただければと思います。

（平尾委員）

すいません。繰り返しになりますが、現状認識についての認識が随分甘いのではないかという話なんですが、たぶんその現状認識がどの程度かということによって、このキャッチフレーズのトーンが、かなり決まってくるという感じがします。

今、伊藤さんがおっしゃったのと、私、かなり近い認識があって、土台からつくり直していかなければいけないくらい、長野は今大変な状況で、それは人材育成から産業から、環境も含めて、相当危機的な状況だと思います。それを県民と共有するためのキャッチフレーズでないと、どうも私は、そのさわやか信州の中で長野県の観光がどんどん埋没していった記憶を、またこういうキャッチフレーズを見るとどうしても思い出してしまいます。

もっと危機意識を前面に出して、こういう状況だから皆さん共有して、この危機を乗り切っていこうというくらいなメッセージがあってもいいという感じがします。
　そのときに、このノスタルジックな信州という言葉は、どうも合わない。それよりも、我々の住んでいる長野をこれからどうするのかという危機感を背景に持って、この言葉、このエッセンスを、だれに対して発信していくのか。県民に対して、しかも次の世代に対して発信していくのか。そのへんを、議論していかないと、いきなり全部信州というふうに出ているので、私は少しびっくりしたんですけれども、そのへんの議論こそ大事ではないでしょうか。

（松下委員）
　次ができました。私は、信州にこだわっておりませんので、例えばですけど、今の危機感に乏しいということをそのまま表してですね、「変えよう、だれもが幸せを実感できる、長野に」としたらどうかと思いました。
　ころころ、僕は変わりますけれども。頭に変えようという、強い意志を、あるいは次の世代へのメッセージを込めて、「だれもが幸せを実感できる長野に」というような、「長野へ」とか、なんかそんなようなフレーズもあるのかなと思って今、第２案を提案しました。

（小宮山会長）
　私はひとつは環境が前回非常に議論になったので、なにかひとつこう環境を大事にしていく、先ほどの先進県だ、世界一自然との共生だとか、こういうような意味で、この環境をひとつ出したいと思いました。
　それから、確かに私が出した案では、教育面がちょっと欠けていますので、例えば今、伊藤委員から出た、「飛躍の力」とか「生きる力をはぐくむ」というのは、これは将来に向けての意志が出ているという気もします。
　それから、「みんなの」と言ったのは、これからは県だけが、あるいは自治体だけが頑張ってもだめなので、県民の総合力をというようなところを思ったものですから、みんなでつくっていこうというような意味をちょっと出してみました。
　実はですね、パブリックコメントをこれから求めようと思うので、ここで決めたいのですが、どうしましょうか。どの案もそれぞれいいようですが。

（若林委員）
　この論議を続けても、ひとつになるというのはなかなか難しいと思うんですね。もし決めていくということになれば、２案なり３案なりをつくっていただいて選んでいくというやり方が、一番まとまりやすいと思うんですが。

（岩崎課長）
　ただいま、若林委員からもご指摘ございましたけれども、非常に多方面からご意見をいただきまして、なかなかこの場でまとめるのは大変だと思いますので、今いただきましたご意見を、私どもでもう１回整理させていただいて、何案かにして委員の皆さんにもう一度お送りして、その中で選んでいただくというような形にさせていただきたいと思います

がよろしいでしょうか。

（小宮山会長）
　それから、平尾委員からの信州か長野かということも結構基本的なことなんですが。

（花岡委員）
　参考になるかどうか分かりませんが、信州、信濃、長野と呼称がありまして、かつて、調査したことがあります。イメージ的には信州という呼称が、圧倒的に人気が高い。確か７割から８割ぐらいの支持がありました。長野と信濃っていうのは、ほぼ10パーセント台ぐらいでした。このように格段の差があって、信州が今までいろいろな形で横綱として扱われてきている。そういう経過があります。
　今やったわけではなく、過去にやったデータですが、県民のイメージとしては、信州を支持する人が多いということがありました。

（平尾委員）
　それは大変大事なことで、たぶん受け入れやすい言葉を、ここのキャッチフレーズに入れるということも、浸透させるための戦略としては大事かなという気はしますけれども、そのメッセージとして何を盛り込むかということを考えた場合に、過去を引きずるような長野県の姿が、これからの50年後にふさわしいかどうかという、そういう意識もやはりこの計画の中にあってもいいのかなという気はします。ずっと、信州、信濃、これでいいのかという思いです。
　新しい時代に、自分を自ら変えて、大きな曲がり角をきちっと曲がって、その危機的な状況をクリアしていくというときに、相変わらず信州だよということで、今までずっとこうつながってきたものを、どっかで断ち切らなければいけない、あるいは意識を変えていかなければいけないというのが、相当多く出ています。そういうものが一方にありながら、依然としてみんなが愛着のある信州を使うのは、みんなが愛着のある信州流を残しながら、新しいものをつくっていこうというのに等しくなるような気がして仕方がありません。そのへんも、皆さんに知恵を絞っていただければいいなと私は個人的に思っています。あまり、信州という言葉にこだわる必要はないと思います。

（小宮山会長）
　それでは、今日いただいたご意見をもう一度まとめてみて、ご意見を伺う中で決めさせてください。
　それから、もうひとつ、今日の大綱案の最後の重点テーマですね、以前から横断的に、あるいは重点的にこれからかかわっていくという点で、環境ということが以前から出ていました。それから、健康長寿のこと、それから人づくり、教育ですね。それから、もうひとつ、安心して子どもを生んで育てられるというようなことが以前から出ていたので、とりあえずこの案では、この四つを重点テーマとして挙げてございます。
　この点の確認をいただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

（伊藤委員）
子どもの教育の問題を重点テーマに取り上げていただくことが、とても重要だと思っております。同時にもうひとつ、是非付け加えていただきたいなと思っておりますのが、「めざす姿」の中に「力強い産業が支える活力あふれる長野県」というのがあるので、男女とも働く環境をどう整えていくのかというワークライフバランスですとか、子どもを育てながら働いたり、男性が家庭や教育の問題にも注目したりというような、ほかのテーマにも非常に係わってくるので、働く環境をどのように考えていくのかという問題を、ぜひ重点テーマに入れていただきたいと思います。

（小宮山会長）
働く環境の改善というか、長野県らしさをつくっていくという点は、いかがでしょうか。これは、非常に大事なことだと思います。
それでは、今日ご指摘があったような点については、これから少し練り直して、ひとつの案をつくってみたいと思います。
先ほども少し申し上げましたが、パブリックコメントを求めることになっております。パブリックコメントをいただくのは、日程的にどんな予定でしたでしょうか。

（岩崎課長）
パブリックコメントについては、本日いただきましたご意見を踏まえ、もう一度修正を加えまして、６月末から７月の頭ぐらいの間にお願いできればと考えています。

（小宮山会長）
その間に、先ほどの目標等については、また少しご意見をお伺いしたいと思いますし、それからご指摘いただいた詳細な点については委員にご相談をさせていただきたいと思います。
この大綱についてはよろしいでしょうか。はい、ありがとうございました。
それでは、次の議題、その他でございますが、次回の審議会の開催日程等について、事務局からお願いしたいと思います。

（佐藤企画幹）
次回の開催日程でございますが、３月15日の審議会におきまして、８月２日、木曜日、午前10時から、本日と同じ、この県庁３階の特別会議室で開催されるよう決定されておりますので、よろしくお願いいたします。

（小宮山会長）
はい。次回は、８月の２日ということでございますが、予定に入れておいていただきたいと思います。
用意したのは以上でございますが、まだ若干時間がございます。何か、全般的にございますか。はい、どうぞ、北原委員。

（北原専門委員）
　すいません、先ほどの重点テーマの例のところで、ちょっとうっかりしていたんですけれども、地域懇談会のとき出た意見として、外国人労働者の対策ですね。教育にしろ、それから言語の障害の問題、いろいろ問題になっているかと思うんですけれども、県としての姿勢をしっかりと持っていっていただきたいと思うんで、その働く環境のところに入るのか、どこに入るのかよく分からないんですけれども、そういうことを一筆お願いしたいと思います。

（小宮山会長）
　働く環境のところで、みんなにとって働く環境がよくなる中で取り扱ってはどうかなと思って、今、お聞きしていたんですが、どうでしょうか。

（北原委員）
　そうですね。今まで一言も出てなかったと思うので。ひとつお願いしたいなと思います。
　それから、もう一個ですね、前回の審議会のときに大きな問題になりました限界集落の問題ですね。これは、重点テーマとして、県としてやはり取り組むべき課題で重点になるんじゃないのかなと思うんですけども、これは重点テーマの中のどこに入るのか少し気になっているんですけれど。

（小宮山会長）
　環境がらみで農山村、中山間地域がそれを守っているということで、ここで考えていたんですけれども、どうでしょうか。

（岩崎課長）
　中山間地域につきましては、前回、非常に議論をいただいたところですけれども、私ども、この整理の中では、第４の施策の基本方向の中、13ページの「（５）交流が広がり活力あふれる地域づくり」の２段落目の一番下のところですけれども、「さらに」以下で中山間地域対策について記載をしておりまして、この中でその次の主要施策のところも出てくるというふうに整理をしていきたいと考えています。

（古田委員）
　関連してですが、私も先ほど、どういうふうにどこに入れればいいかなと、重点テーマのときに考えていて、まだ発言しなかったんですが、人づくりとは別に、人と人とのネットワークを生かした地域づくりというのを、別の項目なのか、ここに入れていくのか、ちょっと考えていたところだったんです。
　もし可能であれば、今の限界集落も含めて中山間地域のこととか、農山村のことも入れて地域づくりというようなものが、ひとつ起こせるんであれば、そこに入れていけるのかなというような気もします。
　全体にかかるといえば、全部が地域づくりで、全部にかかってしまうので、ちょっとずつ入っていくのかなと私も考えていて、まとまらなかったから言わなかったんですが。

（小宮山会長）
　地域コミュニティの問題ですね。それから地域づくり、それからこの前出た、山を守る、自然を守る。そのへん検討させてください。

（古田委員）
　あと、全体を通してですけれども、長野が非常に危機的な状況にあるということを認識していくこと、それも重要なことだと思いますが、今ある、あるいはもう萌芽が出ている、大変先進な部分というか豊かな部分を、長野県らしさとして伸ばしていこう、あるいはこれ以上崩れないようにしていこうということも必要だと思っていまして、その点で、長野県らしさというのを書き込むべきだというのを最初の審議会で発言したんですけども、今日の資料を拝見しますと、長野県らしさという言葉は入っているのですが、その中身が何かというところが分かりません。いろいろな解釈があって、これでいいのかもしれませんが、例えば７ページの「長野県らしい骨太の観光振興」とはなんだろうみたいなことが残っています。「らしさ」という言葉を書くのと、中身を書くのは違うのかなという感じがいたしますので、見直すときに、「らしさ」で何を入れていくのかそのへんをちょっと考えていただきたいと思います。
　例えばなんですけれど、先ほどのところでしたら、長野県らしい骨太、本当に骨太っていうのは、重要なことだと思うんですけれど、例えば書くのであれば、地域の住みよさを基盤とした観光振興であるとか、自然との共生や持続的可能性を追求した観光振興とか、そういう中身を書いたらどうかなと思います。
　長くなってすみませんが、一言だけ。結構気が付かれていないんですけれども、例えばご意見を見ていくと、給食の問題とか入っているんですけれども、全国の給食の集まりなんかでは、長野県に皆さんが視察に来るんです。それくらい非常に、先進的な学校給食をやっているところがたくさんある県でして、例えば、食のことですが、そういう食の問題の先進県、スローフードの先進県であるというところがあるんです。例えば、国会の文教委員会で２時間、真田の給食だけが取り上げられたり、視察に来るようなところがたくさんあるのですが、県の中では知られていなかったりします。そういういいところに、県全体をレベルアップしていくような形で、この後の細かい施策のところには書き込んでいけたらいいのかなと思います。

（細川委員）
　地域づくりの中に外国人を入れるのでしたら、忘れてほしくないのは、障害者が地域でともに学び、ともに暮らし、ともに働くという、障害者の視点が一切具体的なことに入ってないので、そこはどうしても入れていただきたいなと思います。今、施設から地域へという、大きな流れになっております。地域の中に、自然な形で障害者がともに学び、暮らしているというのを、どこかに入れていただきたいと思います。

（小宮山会長）
　ちょうど、予定の時間になりました。

それでは、これで閉じたいと思いますが、今日も本当に貴重なご意見をありがとうございました。それでは、若干宿題を残しましたが、またよろしくお願いいたします。

（佐藤企画幹）
以上をもちまして、長野県総合計画審議会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。